マタイ 1:1-6「旧約と新約の福音」

聖句

「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクを生み、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、アラムはアミナダブを、アミナダブはナフションを、ナフションはサルモンを、サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、エッサイはダビデ王をもうけた」

ここに一人の税金取りがおりました。その名をマタイと申します。のちに主イエス・キリストの弟子となり、わたしたちが今朝ひもときました「マタイによる福音書」を書き記す人物となります。

そのマタイは、主イエスと出会う以前、ガリラヤ湖のほとりの町で、税金取りをしておりました。

聖書の舞台であります地中海世界は当時、世界最強のローマ帝国によって支配されておりました。ユダヤの人々の国もまた、ローマの支配のもとに置かれていたのです。マタイは、このローマの手先となって、自分の同胞たちから税金を取り立てるという仕事を、なりわいとしておりました。このことは、マタイの自尊心を深く傷つけていたでありましょう。

マタイはまた、レビという別の名を持っておりました。レビという名前は、神殿で神に仕える祭司の一族の家系であることを表わしています。

いにしえの日、ユダヤの人々の先祖がエジプトで奴隷状態に置かれていたとき、神は預言者モーセをお遣わしになり、力強い奇跡によって、先祖らをエジプトから連れ出し、緑したたる約束の地へと導きのぼられました。そのおりに神は、預言者モーセの家系であるレビの一族を特別にお選びになって、これを、神殿で神に祈り、神に供え物をささげ、神に賛美の歌をうたう者として、祭司の務めをお授けになりました。それ以来、レビの一族は神に仕え続けて来たのです。

そうであるにもかかわらず、レビは、すなわち、わたしたちのマタイは、外国人の手先となり、湖のほとりの町の関所に立ち塞がって、疲れ切った顔で行き

来する同胞たちから、来る日も来る日も、税金を取り立てなければならなかったのです。

マタイは、ここは、自分のいるべき場所ではない、と思っていたに違いありません。マタイは、これは、本来あるべき自分の姿ではない、と思っていたに違いありません。

しかし、ローマが圧倒的な力をもって支配している現状にあっては、弱く、小さく、臆病なマタイには、なすすべはありませんでした。マタイはただ、自分の魂を押し殺して、重苦しい現実、灰色の現実を受け入れるしか、なかったのです。

その重苦しい現実の中に、ある日、さわやかな風が吹いて来たのです。
その灰色の現実の中に、ある日、ガリラヤの小高い丘に一面に咲く草花のように、あざやかな色がともされたのです。

マタイは、主イエス・キリストと出会ったのでした。

主イエスは言われました。「心の貧しい人々は、幸いだ。天の国はその人たちのものである」（マタイ 5:3）

重苦しい現実の中で、弱く、小さく、臆病であるゆえに、魂を押し殺して生きざるを得なかったマタイ。そのマタイに向かって、「心の貧しい人々は、幸いだ。天の国はその人たちのものである」という言葉が、語られました。

主イエス・キリストの言葉は、死んでいたマタイの心にいのちを与えました。
ずっと閉じられていたマタイの心の目が、新しい光の中で、開かれていきました。

マタイは、自分がものごころがつかないほど小さな時から、おじいちゃんおばあちゃん、お父さんお母さんから、繰り返し聞かされてきた聖書の物語を思い出していたに違いありません。その聖書の物語が、いまや、主イエス・キリストとの出会いを通して、とてつもなく重要なことを、マタイにとって意味し始めたのです。

マタイは、福音書のページに「アブラハムの子、イエス・キリストの系図」と

いう言葉を書き記しました。

アブラハムとは、マタイが小さい頃から聞かされて来た聖書の物語の中で、最も重要な族長であります。いにしえの日、神はアブラハムに現れて、「わたしが指し示す地へ行きなさい」と告げられました。アブラハムは、目に見える保証がなにひとつなかったにもかかわらず、故郷を捨て、ひたすら神を信じて、旅を続けました。この純粋な信仰のゆえに、神はアブラハムを祝福なさいました。

神は、アブラハムに約束されました。

「これがあなたと結ぶわたしの契約である。
　あなたは多くの国民の父となる」
「わたしは、あなたをますます繁栄させ、諸国民の父とする。
　王となる者たちがあなたから出るであろう」
「わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、
　それを永遠の契約とする」（創世記 17:4-7）

これは、永遠の約束であります。この永遠の約束により、アブラハムの子孫を通して、神の祝福が世界のすべての人に及ぶ、と約束されました。

この約束は、いったい、反古にされてしまったのだろうか？　この約束は、いったい、忘れ去られてしまったのだろうか？　重苦しい現実、灰色の現実の中で、マタイは何度も、そう考えたに違いありません。

しかし、今、主イエス・キリストのお姿を目の前に見るときに、マタイは確信したのです。いにしえの日、神が父祖アブラハムに告げられた「約束の子孫」がついに来られた。このお方こそ、まさにそのお方に違いない。このお方を通して、すべての人々が祝福されるに違いない。そう確信したのです。

マタイは、福音書のページに、さらに「ダビデの子、イエス・キリストの系図」という言葉を書き記しました。

ダビデとは、マタイが小さい頃から聞かされて来た聖書の物語の中で、最も偉大な王であります。いにしえの日、神はダビデに油を注ぎ、王の務めに任じられました。ダビデは、年が若く、体格も小さかったにもかかわらず、ひたすら神を信じて、勇敢に敵と戦いました。この純粋な信仰のゆえに、神はダビデを

祝福なさいました。

神は、ダビデに約束されました。

「あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなた王座はとこしえに堅く据えられる」（サムエル下 7:16）

これもまた、永遠の約束であります。この永遠の約束により、ダビデの王座はとこしえに続く、と神によって保証されたのです。

この約束は、いったい、反古にされてしまったのだろうか？　この約束は、いったい、忘れ去られてしまったのだろうか？　重苦しい現実、灰色の現実の中で、マタイは何度も、そう考えたに違いありません。

しかし、今、主イエス・キリストのお姿を目の前に見るときに、マタイは確信したのです。いにしえの日、神が王ダビデに告げられた「とこしえに王座を継ぐ者」がついに来られた。このお方こそ、まさにそのお方に違いない。このお方を通して、すべての人々が祝福されるに違いない。そう確信したのです。

そう確信したマタイは、主イエス・キリストにすべての望みを置いて、弟子となって、お従いしたのです。

ですが、マタイを長い間とらえていた重苦しい現実、灰色の現実は、しばらくの間は、主イエスのもとで、マタイから立ち去ったかのように思われましたが、しかし、ふたたびマタイに追いついて、マタイをしっかりとつかまえてしまったのでした。

あの暗い日。主イエス・キリストが捕らえられ、裁判にかけられ、辱めを受け、十字架を負わされ、よろめきながらゴルゴダの丘へと進み、十字架に釘付けられて息絶えたあの日。マタイが恐れていた重苦しい現実、灰色の現実が、ふたたびマタイに追いついて、マタイを失望の淵の中につなぎとめてしまったのでした。

この物語が、それで終わっていたならば、どうでしょう。マタイはすべての望みを捨てて、ただ毎日お金を取り立て、ただ毎日お金を数えるだけの、あの生活の中へ、戻って行ったに違いありません。

このお方こそ、まさにそのお方だ。そう信じて、お従いして来たのに、今や、主イエス・キリストは冷たくなって、墓に収められていました。

この重苦しい現実の中に、しかし三日目に、さわやかな風がふたたび吹いて来たのです。
この灰色の現実の中に、しかし三日目に、ガリラヤの小高い丘に一面に咲く草花のように、あざやかな色がふたたびともされたのです。

マタイは、よみがえられた主イエス・キリストと出会ったのでした。

よみがえられた主イエス・キリストは、マタイの目の前で、言われました。
「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によってバプテスマを授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ 28:18-20）

よみがえられた主イエス・キリストの言葉は、死んでいたマタイの心に、ふたたびいのちを与えました。一度は開かれ、いままた閉じられてしまったマタイの心の目は、新しい光の中で、ふたたび開かれていきました。

マタイは、自分がものごころがつかないほど小さな時から、おじいちゃんおばあちゃん、お父さんお母さんから、繰り返し聞かされてきた聖書の物語を思い出していたに違いありません。その聖書の物語が、いまや、主イエス・キリストとの出会いを通して、しかも、十字架にかかり、死んで葬られ、三日目によみがえられた、復活の主イエス・キリストとの出会いを通して、とてつもなく重要なことを、意味し始めたのです。

マタイは、福音書のページに「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」という言葉を書き記しました。

復活の主イエス・キリストに出会ったマタイが確信をもって語る「良い知らせ」の最初のページを、わたしたちは今日こうして開き、目にしています。どうか、

よみがえられた主イエス・キリストが、マタイに出会ってくださったように、わたしたちも出会うことができますように。祈りましょう。

祈り

恵み深い天の父なる神さま。

かつてのマタイをとらえていたように、わたしたちもまた、重苦しい現実、灰色の現実の中で、希望を持ち得ず、失意のうちに過ごすときがあります。

しかし、その重苦しい現実の中に、さわやかな風が吹いて来ました。その灰色の現実の中に、ガリラヤの小高い丘に一面に咲く草花のように、あざやかな色がともされました。

わたしたちに希望を、また、いのちを与えるために、神のひとり子、主イエス・キリストをお送りくださいましたことを、心から感謝いたします。

福音書記者マタイは、主イエス・キリストとの真実な出会いを経験いたしました。しかも、よみがえられた主イエス・キリストとの出会いを経験いたしました。これは、まことに個人的な経験であり、希有な経験であり、大切な経験であります。

どうかわたしたちも、主イエス・キリストとの真実な出会いを経験することができますように。どうかわたしたちも、よみがえられた主イエス・キリストとの出会いを経験することができますように。

重苦しい現実、灰色の現実から、わたしたちが自由に解き放たれ、とこしえの望みである主イエス・キリストが、わたしたちをいつもとらえていてくださいますように。

マタイは、主イエス・キリストによってとらえられたことの証しとして、福音書の最初のページを書き始めました。

わたしたちもまた、主イエス・キリストによってとらえられたことの証しとして、自分の人生のページの上に、喜びのおとずれの言葉を、生きた言葉を、書き記して行くことができますように、どうか、お導きください。

わたしたちの主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。